

# 小学校道徳 沖縄県郷土資料集

## 指導案例

1. きゅうしょくセンターの 人たちへ …………… 2
2. いれいの 日 六月二十三日の できごと …………… 4
3. 海はだれのもの? 琉神マブヤー …………… 6
4. ふるさとに目を向けて わんぱく体験団…………… 8
5. 宮古島のマンゴーさいばい ……………10
6. 沖縄から世界へ 喜友名 諒……………12
7. 山に灯る一文字 銭ヶ森の光文字 ……………14
8. 伝統をつなぐ 古武道家・仲本政博 ……………16
9. 生き続けた糸数さん ……………18
10. 琉球ガラス職人 池宮城 善郎……………20
11. 守り, 受けつぐべきもの  
うるま市の平敷屋 (東) エイサー ……………22
12. 「琉球國祭り太鼓」の挑戦 創作エイサー誕生 …24
13. 平和をつなぐ ひめゆり平和祈念資料館 ……………26
14. ヤンバルクイナの森 ……………28

本資料は、一般社団法人教科書協会  
「教科書発行者行動規範」に則り、  
配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



未来をになう子どもたちへ

日本文教出版

琉球大学 教授

監修 上地 完治

※本冊子掲載 QRコードのリンク先コンテンツは予告なく  
変更または削除する場合があります。  
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

## きゅうしょくセンターの人たちへ

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと。

## ① ねらい

「わたし」が手紙を出した理由や、センターの人の返事の意図について考え、郷土料理に興味をもったり好きになったりすることのよさを理解する。そして郷土料理に興味関心を持ち、親しみをもって生活しようとする態度を育てる。

## ② 主題設定の理由

## (1) ねらいや指導内容について

低学年の児童が、我が国や郷土の文化と生活に親しみをもつ機会は結構ある。例えば、生活科を通して昔遊びを体験したり、地域の行事を通して昔から伝わる身近なものに触れたり、給食の中から食文化に触れたりすることなどである。

しかし、児童は我が国や郷土の文化なのか、そこに何の価値があるのか気づいていないことも多い。そこで、給食での一場面をきっかけに郷土愛に着目し、郷土料理には栄養の豊富さだけでなく、地産地消であったり、郷土の味として人々に長く親しまれたりしている価値があることに気づかせる。そうして郷土料理に関心と誇りを持ち、郷土の食文化やひいては我が国の食文化を大切にしようとする態度を育む。

## (2) 児童の実態について

郷土料理は揚げパンやスパゲッティなどに比べて人気は低い。また、家庭で郷土料理が出ることが少ないせいか、郷土料理についての知識や食する経験も乏しいようだ。しかしそれは、単に郷土料理であることや、栄養面以外でのよさについて考えたことがないからなのかもしれない。低学年は、自分が興味をもったものや、よさを見出したものには積極的に関わろうとするところがあり、本時を通して郷土料理に少しでも興味関心をもってもらいたい。

## (3) 教材について

児童の身近にある郷土の文化に親しむものの1つとして、「郷土料理」が挙げられる。給食では度々郷土料理が出てくるが、児童は食わず嫌いであったり、そもそもそれが郷土料理であることを知らなかったりする。そこで、栄養指導だけにとらわれず、自発的に食に興味をもつという視点からも、郷土料理に興味関心をもたせ、親しみをもって生活しようとする態度を育てたい。

具体的には、センターの人からの返事の意図を考えることで、郷土料理のよさを見出したい。しかし、よさを押し付ける指導に陥らないように、否定的な意見も十分に取り上げ、「わたし」が手紙を書いた理由と関連させたい。そうして、「郷土料理のよさ」を尋ねるのではなく、「郷土料理に興味・関心をもつことのよさ」について考えることを

通して、自分も食べてみたい、調べてみたいという意欲を引き出すのがねらいである。食育指導ではないので、すぐに好きにはならなくても、郷土にこのような料理があることを知ったり、誇りをもてたりするよなきっかけとしたい。

## ③ 教材活用のポイント

- 「郷土料理がなくなったら、みなさんは困りますか。」というゆさぶりの発問から、正解ありきの授業ではなく、「わたし」の気持ちにも共感しながら、安心して郷土料理について広く、深く考えられるようにする。
- 郷土料理に興味関心をもつよさについて考えることで、郷土料理自体が好きでも嫌いでも、郷土に受け継がれてきたものの価値を見出せるようにする。

## ④ 他教科等との関連、家庭・地域との連携など

- 授業後、朝の会等で今月の献立表を使って、いつ郷土料理が出てくるのか、どんな郷土料理かを前もって告知することで、さらに興味関心を高めたい。
- 学級通信、あるいは道徳通信などで、授業の内容(ねらい)を保護者に紹介し、家庭でも積極的に郷土料理に親しむ環境を整えることを通して、児童の変容を期待し、日記や朝の一言リレーなどで評価、共有していきたい。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

- 郷土料理に、興味をもったり好きになったりすることのよさについて考え、理解することができていたか。

## (児童の振り返り例)

今日わかったことは、嫌いな料理も興味をもったり、好きになったりすると、いいところに気がつくようになるかもしれないということです。そしたらもっと好きになって、人に紹介したくなるかもしれません。

- 郷土料理に興味関心を持ち、親しみをもって生活しようとしているか。

## (児童の振り返り例)

今日の学習でわかったことは、郷土料理には栄養がいっぱいあるということです。それに、今まではあまり好きじゃなかったゴーヤーチャンプルーも、沖縄の自慢なんだと思うと少しうれしい気持ちになりました。なんだか前より少しは食べてみようかなと思いました。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 好きな給食の献立を 発表する。	○ 給食の献立で好きなものは何ですか。 ・揚げパン ・スパゲッティ ・カレーライス	* 好きなものの中に郷土料理が入っている か、把握する。もしあれば、どんなところが 好きか、逆に嫌いなものがあればその理由を 聞いて、価値理解への方向づけをする。
展開	(2) 教材「きゅうしょく センターの人たち へ」を読んで、考え、 話し合う。	○ 「わたし」はなぜ、給食センターの人たち へ手紙を書いたのですか。 ・なぜみんなが嫌いなゴーヤーチャンプルーを 出すのか不思議に思ったから。 ・代わりに揚げパンとかを出してほしいから。  ○ 給食センターの人は、クラスみんなに何 を考えてほしかったのかな。 ・苦いとか嫌いという理由で、郷土料理をなく すのはもったいないこと。 ・郷土料理のいいところ。  ○ 郷土料理がなくなったら、みなさんは困り ますか。沖縄の料理にこだわるより、みんな に人気のある料理が毎日出た方がいいのでは。 (賛成) ・その方が残飯は減るし、給食がもっと楽しま になるよ。 ・私もゴーヤー苦手だから、揚げパンがいい。 (反対) ・栄養が偏っちゃうよ。 ・沖縄のよさがなくなってしまいそう。	* 手紙の意図を尋ねることで、諸々の場面把 握をすることができる。 ▲ 「ゴーヤーチャンプルーって確かに苦いよ ね。先生も小さい頃は苦手だったな。みんな はどうですか。」 * 先生が共感する姿勢を見せることで、強 がったりせず本音が言える。 ○ わがままではなく、素直な意見としてよか れと思って手紙を書いている。  * 「郷土料理をなくすもったいない」とい う言葉に触れ、補助発問等を加えながら何が どうもったいないのか、センターの人たちの 思いを深めていく。
	(3) 郷土料理に興味をも つことのよさについて 考える。	◎ ゴーヤーチャンプルーだけではなく、郷土 料理に興味をもったり、好きになったりする と、どんないいことがあるのかな。 ・栄養満点の食事がとれるようになる。 ・好きな献立が増えて給食が楽しくなる。 ・沖縄のことをもっと知って、自慢できる。 ・郷土料理がこれからもつながっていく。	* ゆさぶりの発問 ○ 賛成、反対両者の意見を尊重したい。 それでも郷土料理を残そうとするセンターの 人たちや、現に受け継がれてきていることを 考慮して、そのよさについて考えを深めてい く。  ○ 児童の思考が「ゴーヤーチャンプルー」の みに固執せず、視野を広げるために他の郷土 料理もここで紹介するとよい。 * 「郷土料理のよさ」ではなく、「愛着をもつ ことのよさ」を考え、自分ごととして捉えさ せたい。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 教室がしばらくシーンとしていたり、他の 郷土料理を調べ始めようとしたりしたのは、 どんな気持ちになったからかな。 ・郷土料理について少し興味が出てきたから。 ・センターの人たちの思いがわかったから。 ・郷土料理っていいかもって思い始めたから。  ○ 今日学んだことをノートに書きましょう。	* 一見、展開後段の発問のようだが、価値理 解を確かめるための発問。  ○ 学びのたしかめをすることで、個人の振り 返りの内容が偏ってしまったり、この発問で は振り返りが難しいと思ったりする場合は、 すぐに個人の振り返りを書かせてもよい。

# いれいの日 六月二十三日の できごと

## ◇内容項目：D 生命の尊さ

生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。

### ① ねらい

慰霊の日に行っているイベントは、人々を楽しませることが本来の目的ではなく、戦没者を追悼する思いや平和を大切にしていこうとする願いが込められていることに気づき、生命を大切にしていこうとする心情を育てる。

### ② 主題設定の理由

#### (1) ねらいとする価値について

「生」と「死」は表裏一体の関係にある。そういう意味では、「生」を考えることは「死」を意識することであり、「死」を考えることは「生」を学ぶことともいえる。とはいえ、低学年の児童にとって「死」から「生」を考えさせることはかなり難しいことである。しかし、我が国では、昔、戦争で多くの尊い命を犠牲にしてしまったという歴史があり、二度と過ちを繰り返してはならないということを経年のうちから考えさせることは意味あることだと考える。

そこで本時では、昔、我が国では戦争という悲惨な歴史があり、そこで多くの犠牲をもたらしてしまったという事実があることを理解させ、さらに、その過ちを繰り返さないように戦没者を追悼し平和を祈願する様々な取り組みが行われていることに気づかせたい。

#### (2) 児童の実態について

この時期の児童は、平和学習を通して、慰霊の日や終戦記念日などの意味を学校や家庭で教えられ、戦争についての大きな知識は知っていると思われる。児童の中には、戦没者を追悼するためのイベントに参加したことがある児童もいるであろう。しかし、慰霊の日や戦没者を追悼するためのイベントの本来の意義を意識している児童は少ないといえる。中には自分が楽しいと思うゲームや花火などにしか興味をもてない場合もあるだろう。

このような児童に、改めて慰霊の日や戦没者を追悼するためのイベントの本来の意味について考えさせ、地域の人々の思いや願いに気づかせたい。

#### (3) 教材について

毎年、6月23日の慰霊の日になると、糸満市の平和祈念公園でサーチライトや灯籠流しなどのイベントが行われる。実は、そのイベントにはちゃんとした意味があり、戦没者追悼の思いが込められている。

本教材に出てくるさとしは、最初、「慰霊の日」はみんなが楽しむイベントだと思う。しかし、気になったことをお母さんに質問したことから、慰霊の日の本当の意味に気づくという内容になっている。

ここで、さとしが素朴に感じた疑問から、サーチライトや灯籠流しに込められている人々の思いや願いに気づくまでの過程を取り扱い、楽しむためだけにやっていると

ていたイベントは、戦争で亡くなった人々のことを思い、追悼する思いが込められていることや、生命の尊さと平和の大切さを考えるための取り組みであるということに気づかせたい。

### ③ 教材活用のポイント

○お母さんの言葉を聞いたさとしの思いを問うた際、表面的に書かれていることを発言する児童が多いと思われる。そこで「本当はゲームや花火をした方がいいのでは」と問い返すことで、児童の多面的・多角的な思考を促しねらいに迫る。

○サーチライトの意味については、下記の参考資料を参照。

○あなたなら灯籠のメッセージにどんなことを書きたいかを問うことで、自己の在り方につなげて考えさせる。

### ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

6月の平和集会や平和学習と関連させることで、道徳科での授業のみならず、教科横断的な学びを生み、資質・能力の育成にもつなげる。

### ⑤ 子どもの見取りのポイント

○慰霊の日に行われているイベントには、戦没者を追悼する念や、平和を大切にしていきたいという人々の願いが込められていることに気づくことができたか。

○教材から学んだことを通して、メッセージに自分なりの思いを書くことができたか。

#### ■参考資料「平和の光の柱」

平和の礎には、沖縄戦で亡くなった日本、米国、英国、朝鮮半島、台湾の5か国・地域の戦没者が刻まれている。これら戦没者のトートナー（位牌）として白木の柱に見立てた5本のサーチライト（平和の光の柱）の厳かで神秘的な純白無垢の光の柱で沖縄戦終焉の糸満摩文仁の地と天を結ぶ。

また、キャンドルを灯して、若い世代へ73年前の沖縄戦の体験を継承し、より多くの県民に、慰霊の日と前夜祭に慰霊と平和を発信する。

（2018年 公益財団法人沖縄県平和祈念財団 HP より）

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 地域の行事やお祭りについて話し合う。	○ 地域の行事やお祭りを知っていますか。 ・那覇祭り ・大綱引き ○ 行事や祭りのよい所はどこですか。 ・ゲームができる。 ・おいしいものが食べられて楽しい。	* お祭りやイベントのイメージを引き出し共有する。 ○ イベントへの素直な気持ちを出させることで、教材のさとしの気持ちに共感させる。
展開	(2) 教材「いれいの日」を読んで、考え、話し合う。	○ サーチライトを見たとき、さとしくんはどんなことを考えましたか。 ・きれいだな。 ・誰が考えたんだろう。 ・光はどこまで続いているんだろう。 ・何のために照らしているのか。  ○ サーチライトや灯籠流しは、何のためにやっているのか考えてみましょう。 【サーチライトについて】 ・戦争で亡くなった人をなぐさめるため。 【灯籠流しについて】 ・亡くなった人の思いを大切にしたい。 ・平和を願う気持ち。 ・静かで安心する場所を作ってあげたい。	* お祭りやイベントには意味があることに気づかせ、その意味を考えさせていくための方向づけをする。 ○ 教材に書かれていることの他にも、気になったことや疑問に思うことを引き出す。  * イベントの意味を考えることを通して、サーチライトや灯籠流しには、きちんとした意味があることに気づかせる。 ▲ 「サーチライトを照らすことが、なぜ戦争で亡くなった人をなぐさめることになるのだろうか。」 ○ 児童の声を丁寧に聞きながら、「なぐさめるとはどういうことなのか」や「亡くなった人の思いとはどんな思いなのか」を問い返ししながら、児童の真意を引き出す。 ▲ 「お祭りなんだから、ゲームや花火などのもっと楽しいことをした方がいいのではないか」と問い返すことで、児童の本音を引き出しながらねらいに迫る。
	(3) 平和の大切さについて考える。	◎ さとしくんの言うお祭りの意味とは何ですか。 ・楽しむだけでなく、戦争で亡くなった人をなぐさめるためのもの。 ・平和を願うためのもの。 ・平和を守って行って欲しい。  ○ みんなだったら、メッセージにどんなことを書きますか。 ・これからも、ゆっくり眠ってください。 ・これからも、平和で仲よくできますように。 ・平和がつながっていきますように。	* 今までお祭りは楽しいだけだと思っていたさとしが、イベントの意味を理解したことを通して、イベントには本来の意味（戦没者を追悼する思いや、平和を大切にしていこうとする願いや思いが込められているという）があることに気づかせる。  ○ イベントを企画した人たちには、どのような思いや願いがあるのかを問うことも効果的である。 * あなたならメッセージにどんなことを書きたいかを問うことで、教材と自分の在り方をつなげて考えさせる。 ○ 今日の学習を生かして、自分なりのメッセージを書かせる。
終末	(4) 教師の話聞く。	○ 慰霊の日だけでなく、亡くなった人を追悼するための他の行事やイベントを話して聞かせる。	○ 事前に身近で行われているお葬式や終戦記念日などの趣旨や理由について調べておく。 ○ 教師が話だけでなく、「亡くなった人をなぐさめるための、行事やイベントは他にあるだろうか」など、児童に聞くことで自覚がさらに深まる。

# 海はだれのもの？ 琉神マブヤー

資料集

p.10～p.15

◇内容項目：D 自然愛護

自然のすばらしさや不思議さを感じ取り、自然や動植物を大切にすること。

## ① ねらい

「海は誰のものか」について、人間の視点、海の危険生物の視点から捉え、「大きな海のつながり」の意味に気づき、自然とのかかわりについて多面的・多角的に考えることを通して、道徳的判断力を育む。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

自然を愛護することを、私たちは自明のこととして考えている。実際、動植物には優しく接したり、ごみのポイ捨てや海洋汚染・森林伐採のような環境破壊には嫌悪感を抱いたりして、美しい自然を守りたいと願っている。

しかし、人間の生活を脅かすという理由から、生物が駆除される場合がある。山林部では害獣としての猪など、海では漁や海水浴の妨げとなるサメの駆除を挙げることができる。こうした駆除は、人間の立場から考えた環境保全であり、駆除される生物にとっては脅威である。こうした場合でも、私たち人間は自然を愛護しているといえるのか、議論の余地がある。

児童には、「自然を大切にする」「自然を愛でる」といっても、それは人間側からのみ捉えた自然ではないのか、人間以外の視点から自然を捉えるとどうなるのかを考えさせたい。そのようにして、人間も地球の大きな生態系の一部であることに考えを巡らせるようにしたい。

### (2) 児童の実態について

児童はこれまで、生活科や理科で動植物を育てる経験を通して、身近な自然に親しみをもち、大切にしようとする心を育ててきている。彼らにとって、「自然を大切にする」とは、主に目の前の動植物に優しくすることである。

したがって、生態系のような大きい視野から自然を捉えて考えたことは少ないと思われる。目の前の動植物から視野を広げ、自然界のつながりにまで想像をめぐらせて、自然の大切さを考えさせたい。

### (3) 教材について

人間は海から様々な恩恵を受けている。魚介類を食べていることはもちろん、海水浴をして楽しんだり、その景観を楽しんだりもしている。食料を得るだけでなく、海を観光資源として活用している沖縄県の立場からすれば、海は宝といえる。したがって、海水浴の邪魔になるハブクラゲや、サンゴを食べるオニヒトデは、私たちにとって疎ましい存在であり、駆除の対象となる。

しかし、それは人間側の視点で海を捉えたからにすぎない。「人間にとって」害があるからといって、そうした「危険生物」を駆除することは、海やそこにすむ生物を大切にしているといえるのか。本当の意味で、海を愛護するとは、

どうすることを指すのだろうか。

本教材では、漁師(ウミンチュ)が、「大きな海のつながり」の観点から、駆除の対象である生物にも感謝すると述べている。マヤのように、その考え方を理解できない、共感できない児童も多くいるだろう。本時では、ウミンチュの考え方に納得できるのか、マヤの思いにも共感させながら、「大きな海のつながり」に目を向けていきたい。

また、「海は誰のものだろう」という大きな問いについて児童にも共感させ、人間の立場からのみ考えて海を愛護している気になってはいないか、他の生き物の立場からしてみると、人間の行為はどのように映るのか、海を愛護することについて多面的・多角的に考えさせたい。

## ③ 教材活用のポイント

- 「海のすべての生き物に感謝する」ウミンチュの考え方で、それに納得できないマヤの思いにも共感させながら、「大きな海のつながり」とは何かを考えさせる。
- 「海はだれのものか」を人間側、危険生物側から捉え、多面的・多角的に自然愛護について迫る。

## ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

- 学習の様子を通信で家庭に知らせることで、保護者にもなじみがあるであろうマブヤーの物語をもとに、自然愛護について親子で話し合うきっかけにしたい。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

- 「海は誰のものか」を人間側、危険生物側の視点から捉え、多面的・多角的に自然愛護について考えているか。
- 「大きな海のつながり」とは何かを自分なりに考えているか。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 海についてのイメージを共有する。	○ 海には、どんなよいところがありますか。 ・きれい ・泳げる ・魚がとれる	* 「人間にとって」の海のメリットを共有する。
	(2) 海の危険生物について知る。	○ オニヒトデ、ハブクラゲを知っていますか。 ・サンゴを食べるヒトデ→観光に痛手が生じる。 ・猛毒をもつクラゲ→防護ネットなしでは海水浴ができない。	○ 写真を示しながら、オニヒトデやハブクラゲが、先のメリットと対比して、人間にとって有害で危険な生物であることを印象づけたい。 ○ 説明のあと、「マブヤーの物語にも登場します」と、教材文のマブヤーの説明につなげる。
展開	(3) 教材「海はだれのもの？」を読んで、考え、話し合う。	○ ウミンチュの言う「海のすべてに感謝」とは、どういう意味なのでしょう。 ・人間は海にたくさんお世話になっているから、海のすべての生き物に感謝しないとイケない。 ・そもそも海がないと、おいしいごちそうが食べられないから。 ・人間が食べる魚が生きていくためには、まず海が必要だから。  ○ マヤはウミンチュの言うことに、なぜ納得できないのでしょうか。 ・オニヒトデはサンゴを食べ、ハブクラゲは人を刺し、悪いことしかしていない。 ・オニヒトデやハブクラゲがいない方が、平和な海になる。 ・オニヒトデやハブクラゲがいなくても、誰も困らない。	○ コマを大画面のスライドで見せるなど、教材提示の工夫をしたい。  * 児童の読後の率直な思いを引き出したい。  * マヤのように納得できない児童の本音を引き出したい。 ▲ 「お魚に感謝はできても、オニヒトデやハブクラゲにまで感謝できないよね。」
	(4) 「大きな海のつながり」について考える。	◎ 「大きな海のつながりで生きている」というウミンチュの言葉は、どういう意味なのでしょう。 ・海の生き物は支え合って生きているから、一つでもいなくなると困るということ。 ・人間が一人で生きていけないのと同じように、どの海の生き物も、他の生き物なしでは生きていけないということ。  ○ マブヤーは、なぜ「マジムンをやっつけることが本当にいいことなのか」とまよったのでしょうか。 ・有害生物だって生きているから。 ・人間には悪い生き物でも、ただ静かに生きているだけかもしれない。 ・有害生物がいない方が安全だ。 ・有害生物がいなくても困らない。	* 前の発問で引き出した「海のすべてに感謝」の意味とも関わらせながら、「大きな海のつながり」について理解を深めたい。  ○ 食物連鎖への理解ではなく、海の生き物が（人間も含めて）「共生」の関係にあることに気づかせたい。
終末	(5) 学習を振り返る。	○ 今日考えたことを自由に発表してみよう。 ・悪さをする生き物に感謝するというのは悩むけど、海のつながりを考えるとやっぱり海はすべての生き物のものかな。	○ マヤのように納得できない児童であっても、その理由が本時の学習を踏まえたものか、考えを深めたのかどうかを見取りたい。

# ふるさとに目を向けて わんぱく体験団

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統と文化を大切に，国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

自分たちの郷土には自分たちがまだ知らない魅力があることに気づき，その魅力を知ることにより郷土を愛する心が大きくなることを理解する。そうして，自分の郷土を改めて見つめ，大切にしようとする態度を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

中学年の児童は，放課後や休日に家族や友達と遊びに行く経験を通して，ある程度自分の住む地域のことを知っているだろう。しかし，その遊びがゲーム等の限定的な遊びであったり，いつも決まった場所でしか遊んだりしないという児童がいることも考えられる。

そこで本時では，郷土を見つめ直すことのよさについて考えさせたい。郷土を愛する心の入り口は，まず自分たちの住む地域のよさや魅力に気づき，実感を伴ってそのよさを理解することであると考える。そのよさや魅力に気づけば気づくほど，郷土に興味・関心をもち，郷土を好きになり，誇りをもつようになるのではないだろうか。これまでは何気なく生活していた郷土には，未だ自分たちが知らない魅力があることに気づき，自分の住む地域を見つめ直すことで，郷土を愛する態度を養いたい。

### (2) 児童の実態について

児童は，普段自分が生活している範囲のこと（通学路や公園などの遊び場等）についてある程度のことは知っている。しかし，生活経験は児童によって多様であるため，中には生活する場や生活内容自体が限定的なものになっている児童もいるだろう。

このような現状だからこそ，改めて自分の住む地域に目を向け見つめ直すことで，新たな気づきや学びを得る場を本時を通して創っていきたい。

### (3) 教材について

「わんぱく体験団」は，昔と比べ，地域での生活経験が乏しくなった子どもたちに少しでも地域に眠る魅力を知ってほしい，そして興味・関心をもち，もっと自分の住む地域のことを好きになってほしいという思いで始まった活動である。そして，これは大宜味村だけでなく，どの地域にも子どもたちの知らない魅力がまだまだ眠っており，その魅力に気づけば気づくほどに自分の住む地域のが好きになっていくだろう。本教材を通して，児童が自分の住む地域について少しでも興味・関心をもち，見つめ直すきっかけになってほしいと願う。

## ③ 教材活用のポイント

○郷土に興味・関心をもち，改めて見つめなおそうとするよさについて考えることで，郷土に残る先人たちが継承

してきたものを見出そうとする態度につなげたい。

○自分の地域の魅力を問うことで，自分ごととして捉えさせ，まずは児童間で郷土を見つめなおし，再発見する場をつくりたい。

## ④ 他教科等との関連，家族・地域との連携など

○社会科や総合的な学習の時間では，自分たちの地域の調べ学習を行うため，本時とつなげて授業を行うとより効果的である。

○家族や親戚などに郷土の魅力を尋ねたりすることで，児童も郷土の魅力をさらに知ることができ，また，家庭で聞いてきた郷土の魅力を学級で共有することで，より深く郷土の魅力について知ることができるだろう。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○郷土を見つめなおすことのよさについて考え，理解することができたか。

○自分たちの生活する地域にはまだまだ魅力があることに気づき，興味・関心をもって生活しようとしているか。



⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 自分の住む地域の魅力について話し合う。	○ みんなが住む地域のよいところを挙げましょう。 ・自然がたくさんある。 ・遊具がたくさんある公園がある。 ・楽しいお祭りがある。	* 自分たちの住む地域の魅力を上げさせることで本時への関心をもたせる。
展開	(2) 教材「ふるさとに目を向けて わんぱく体験団」を読んで、考え、話し合う。	○ なぜわんぱく体験団では、自然を生かした活動が行われているのかな。 ・自然が豊かだから。 ・ゲームセンターとかの遊び場がないから。  ○ なぜわんぱく体験団はつくられたのかな。 ・子どもたちに地域の魅力をもっと知ってほしいから。 ・子どもたちに、もっと地域に興味をもってほしいから。  ◎ わんぱく体験団を卒業した人がスタッフとして戻ってきたのはどうしてかな。 ・自分が知っていることを子どもたちに伝えたいから。 ・子どもたちにもっと大宜味村を好きになってほしいから。	▲ 「ゲームセンターなどの遊ぶ場所がないから、自然の中で遊ぶ活動をしているのかな。」 * 自然を生かした活動をしている理由が、自然以外に遊ぶ場がないから仕方なく活動しているのではなく、大宜味村の魅力が自然の中に多いからであることに気づかせたい。  ▲ 「部活や塾で忙しい人もいるし、地域の魅力に気づかなくても生きていけるのに、なぜわんぱく体験団を立ち上げた人たちは、地域の魅力に気づいてほしいと思ったのかな。」 * 地域の魅力に気づくことよさに気づかせたい。  ▲ 「わんぱく体験団を立ち上げた人たちは、自分が知っている地域の魅力を子どもたちに自慢したかったのではないかな。」 * わんぱく体験団を立ち上げた背景には、「地域の魅力に気づき、関心をもち、自分の住む場所をさらに好きになってほしい」という思いが込められていることに気づかせたい。  * 自分の住む地域が好きだからこそ、子どもの頃に気づいた魅力を次の世代にも伝えていきたいという、スタッフの思いに気づかせ、地域を思う心のつながりに気づかせたい。  ▲ 「なぜ、大宜味村をもっと好きになってほしいのでしょうか。」 ○ このスタッフの地域を思う心はわんぱく体験団の活動で育まれたものも含まれているため、わんぱく体験団を立ち上げた人の思いとスタッフの思いをつなげるようにする。 ○ 「地域の魅力に気づく→地域にもっと関心をもつ→自分が知る地域の魅力を他の人に伝えたい→地域の魅力を知り好きになる人が増える」という流れを板書で視覚化する。
	(3) 地域の魅力に気づくことよさについて考える。	○ あなたの住んでいるところには、どんな魅力がありますか。 ・みんなが1つになれるお祭りがある。 ・おいしい果物が穫れる。 ・自然がたくさんあって、生き物がたくさんいる。	* 自分たちの住む地域にもまだまだたくさんの魅力があり、その魅力に気づくことよさに気づかせたい。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 今日学んだことをノートに書きましょう。	

# 宮古島のマンゴーさばい

資料集

p.20 ~ p.23

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統と文化を大切に，国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

宮古島のマンゴーには、「宮古島の農業を発展させたい」と願い，力を注いだ先人の努力や思いが結集していることや，それが今のマンゴー栽培に受け継がれているという事実気づくことで，先人の努力を知り郷土を愛する心情を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

私たちの住む郷土には，必ず自然や歴史が存在する。その中で過ごした日々の様々なできごとが心の原風景として刻み込まれ，やがてはそれが心の支えとなっていく。しかし，それを意識することは難しい。では，郷土を愛する心を育てるには，何が必要なのだろうか。郷土を大切にしなければならぬと頭ではわかっているが，実際にそのことを自覚することは大人でも難しいことである。

そこで本時では，まずは「郷土の歴史を知ること」に焦点を当てて指導していきたい。自分たちの住んでいる郷土には，先人たちの努力や願いが結集された場所や物が存在しているはずである。それを創り上げるために懸命に取り組んできたことや，また，今の自分たちへ受け継がれている事実を知ることによって郷土への愛着を深めることができる。

### (2) 児童の実態について

この時期の児童は，社会科や総合的な学習の時間を通して，地域の産業について興味が芽生え始める頃でもある。同時に，郷土の自然や歴史の存在を感じ始める時期でもある。この時期に，身近にも受け継がれてきた自然や歴史があることに気づかせたい。さらに，それが今日まで誰の手でどのようにつながってきたのかという事実を知ること，郷土の自然や歴史を継承していくための心情を育てる上でも重要なことだと考える。

### (3) 教材について

今では宮古島の特産品として有名なマンゴーであるが，それを確立させるまでには，長い年月と農家の人々の努力があった。水が乏しく毎年のように襲来する台風で宮古島の農家の人々は悩まされる。そんなとき，宮古島の農業を変えたいと思い，伊志嶺富次さんがマンゴー栽培を実験的に始める。最初はうまく栽培できないが，工夫や努力を重ねることで本格的にマンゴー栽培が始まる。ちょうどその頃，沖縄県の事業で地下ダム建設が始まり，水不足を解消することができた。また，マンゴー栽培に国や県が目を止め，補助金を出してくれるようになる。幾度となく降りかかる災難を，宮古島の人々はマンゴーに希望の光を見出し乗り越え，ついにマンゴー栽培を確立することができたという内容になっている。この教材を通して，今では当たり

前のように宮古島の特産品として全国へ広がっているマンゴーだが，先人たちの様々な工夫や努力，そして，「宮古島の農業を発展させたい」という強い思いが，現在のおいしいマンゴーに結集していることに気づかせたい。

## ③ 教材活用のポイント

- マンゴー栽培が確立するまでの過程が見えるような板書にすることで，視覚的に歴史を捉えさせる。
- 適地適作という言葉を生かし，自分たちの郷土にもそのようなモノが存在するか問うことで，教材を自分ごとに引き付けて考えさせる。

## ④ 他教科等との関連，家族・地域との連携など

社会科や総合的な学習の時間と関連させ，地域の自然や歴史の存在に気づかせ，児童が調べてみたい課題を設定し調べ学習を行う。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

- マンゴー栽培を確立していくまでには，力を注いだ先人の努力や思いがあったことに気づくことができたか。
- マンゴー栽培だけでなく，自分たちの身近な作物や文化などの歴史に関心をもちながら，視野を広げることができたか。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 自分の住む地域の産業について話し合う。	○ 身近にはどんな産業がありますか。 ・ 農業（さとうきび栽培，すいか栽培等） ・ 水産業（漁業，養殖業等）  ○ この産業はどのように生まれたんだろう。 ・ いつから始まったんだろう。 ・ 誰が何のために始めたのだろう。	* 身近な産業を取り上げ，それがいつから始まったのか，どうやって創り上げられてきたのかなど問題意識をもたせる。
展開	(2) 教材「宮古島のマンゴーさいばい」を読んで，考え，話し合う。	○ マンゴー栽培が確立するまでに，どんなことがありましたか。 ・ 台風の被害で農作物がダメになる。 ・ 水が乏しいから干ばつが起きる。 ・ 地下ダムの建設。 ・ 国や県からの補助がもらえるようになった。 ・ 土の問題が出てきた。  ○ 農家の人々が一番苦しかったときはいつだろう。 ・ せっかく育てた作物が台風でダメになったとき。 ・ 雨が降らないで干ばつになったとき。 ・ マンゴーがうまく育たなかったとき。  ○ 苦しいことを乗り越えられたのはなぜだろう。 ・ 家族を養っていかなければいけない。 ・ 自分たちの住む宮古島の農業を守りたい。 ・ 宮古島を豊かな島にしたい。 ・ 諦めたくない。必ずいい方法があるはずだ。  ◎ 「マンゴー栽培は，宮古島の希望の光なのです」という言葉には，農家の人のどんな思いが込められているのでしょうか。 ・ 宮古島の農業を発展させたい。そして，人々の暮らしを豊かにしていきたい。 ・ それを受け継ぎ，さらに発展させ宮古島の農業を創り上げていって欲しい。	* 教材の内容を把握しながら，価値への方向づけを行う。 ○ 児童の声を丁寧に聞きながら，構造的な板書で，マンゴー栽培が確立するまでの道筋を示す。  * マンゴー栽培を確立させ，宮古島の農業を発展させるまでの，先人たちの労力や思いに気づかせる。  * 先人の郷土を思う心について考えさせる。 ○ 郷土を愛する心の土台となる道徳的価値は人それぞれ違うことから，正解を求めるのではなく，多面的・多角的に考えさせ，郷土を愛する心を追求していく。 ▲ 「苦しいなら，島を離れて他の仕事を見つけた方が楽ではないか。なぜ，宮古島で苦しい思いをする必要があるのか。」  * 宮古島の農業をマンゴー栽培で暮らしを豊かにしていきたい，それを受け継いでいって欲しいという農家の人々の思いに触れさせる。
	(3) 身近な郷土の伝統産業について話し合う。	○ マンゴー栽培と同じように，先人の人たちから受け継がれているものは，身近にありそうですか。 ・ さとうきび栽培もそうかな。 ・ 漁を始めたきっかけもありそうだ。	* 自分たちの郷土に目を向けさせる。 ○ 農業だけでなく，様々な産業につなげて考えられるようにする。 ○ 導入で子どもたちから出てきた，発言を生かして考えさせると効果的である。 ▲ 「適地適作という言葉があるが，どの地域にも必ず，適したモノが存在すると思いますか。」
	終末	(4) 教師の話聞く。	○ 身近にある産業についての歴史を話して聞かせる。

# 沖縄から世界へ 喜友名 諒

資料集  
p.24～p.27

◇内容項目：A 希望と勇気，努力と強い意志

自分でやろうと決めた目標に向かって，強い意志をもち，粘り強くやり抜くこと。

## ① ねらい

喜友名選手は，どうしてつらいときも空手を続けることができたのか，また，粘り強く最後までやり抜くことの大切さについて考えることを通して，自分自身の夢や目標に向かって努力しようとする態度を育む。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいや指導内容について

児童の多くは，将来の夢や今取り組んでいる習い事や部活動での目標がある。そうした夢や目標，あるいは希望に満ちた未来へ向かって主体的に努力しようとする姿は，児童自身の健やかな成長に大きく期待できるものである。

ところが，挫折や面倒くさいことが続くと，簡単に夢や目標に向かって努力することを怠ってしまったり，中にはその夢や目標さえも積極的にもとうとしなかったりする場合もある。

そこで，夢や目標をもって努力し続けた先には，自分自身にとってどんな未来が待っているのか，また，たとえ努力が実らずつらい日々が続いたとしても，粘り強く最後まで諦めないで努力し続けることは，自分自身にとってどんな意味があるのかなどを考えることを通して，強い意志をもち，粘り強くやり抜くことの大切さを自覚し，何事も前向きで積極的に取り組もうとする態度を育みたい。

### (2) 児童の実態について

児童はなりたい自分，叶えたい希望を少なからずもっている。中学年ともなると，交友関係が広がりを見せ，気の合う友達と一緒にいる時間も増えてくる。そうした中，互いの夢や同じ習い事，あるいは部活動などでの目標を共有しあったり，切磋琢磨しあったりする機会も増えてくる。

しかし，なかなか上達しなかったり，周囲の友達と自分を比べて引け目を感じてしまったりして，粘り強くやり抜くことなく，簡単に諦めてしまうことがある。夢や目標をもつことの大切さや最後までやり抜くことが大切であることは知っていても，行動を伴うことは容易ではないことを実感し始める年頃である。

### (3) 教材について

本教材は，世界の舞台で活躍し続ける沖縄県出身の空手家喜友名諒選手を題材とした，夢や希望，努力と強い意志をもつことの大切さを考えさせられるものである。

喜友名選手自身が挫折や苦悩を繰り返し，その時々で諦めかけたことや，努力し続けた結果世界チャンピオンにまで上り詰めた経験を基にした内容なので，児童にとって共感できる部分もあり，親しみをもってねらいとする道徳的価値について考えを深めることができる内容である。

そして，喜友名選手のように生きることは理想であるが，

その難しさを自らの経験と重ねたり，あるいは想像したりすることで，粘り強くやり抜くことの難しさや大切さを自覚し，その上で自らを鼓舞し，努力しようとする態度の変容へと結び付けたい。

## ③ 教材活用のポイント

○県民の先輩に，世界を舞台に活躍し続ける選手がいることをきっかけに，教材に親しみをもたせ，自我関与しやすくする。

○世界チャンピオンにも，挫折したり思い通りいかない時期があったりした経験があることを知り，どんな人でも粘り強くやり抜くことは容易ではないという人間理解を通して，それでも諦めずに努力し続けた先につかんだ栄光が特別なものであることを想像する。

○実際の演武の動画を導入時に見せて世界一の迫力を感じたり，あるいは終末に見せて世界で活躍する人から刺激を受けたりして，児童が自らを鼓舞できるように題材を大いに生かしたい。

## ④ 他教科等との関連，家族・地域との連携など

○部活動や各種コンクール等で，夢や目標をもって取り組んでいることや，級友の活躍などを取り上げたい。または，地域で活躍する人や保護者の中で功績のある方などの存在があれば，積極的に取り上げていきたい。

○身近な存在に，オリンピックなどでも注目を浴びている先輩がいることで，自らを鼓舞できるようにしたい。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○自らの経験等と重ねながら，人間理解に努め自我関与している発言や振り返りが見られたか。

○強い意志をもって粘り強くやり抜くことの大切さを，具体的に理由づけして考えることができたか。

○これからどんなことを，どのように頑張りたいかなど，積極的かつ前向きに努力することが思い描かれているか。



# 山に灯る一文字 銭ヶ森の光文字

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統と文化を大切に，国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

光文字が継続して行われてきた背景にある，新成人や地域の人たちの思いについて考え，郷土を愛する心が広がっていくことのよさを理解することで，郷土に親しむ心情を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

それぞれの地域には，衣食住をはじめ，季節ごとの行事や祭りなどの文化がある。それらの文化の中には，関わった人たちの思いが込められているものもあり，その思いが地域の人たちに広がることで，地域に支えられ，伝統として継承されてきたものもある。つまり，それぞれの文化にはそういった人たちの思いがある。その思いに目を向けることは，児童が郷土の文化に関心をもつきっかけとなるのではないだろうか。郷土を愛する心は周囲に広がっていくということを知ること，自分も郷土を好きになり，その思いを周囲に伝えたいという心を育みたい。

### (2) 児童の実態について

中学年の児童は地域の祭りや行事などに興味をもつようになり，自ら積極的に参加するようにもなってくる。そして，郷土の伝統・文化に触れることで，自分の住む地域に対する興味・関心が湧いてくる時期でもあるだろう。だからこそ，郷土に残る伝統・文化がどのようにして受け継がれてきたのかを考え，今日まで受け継いできた人たちの思いとその広がりについて気づかせたい。そうすることで，自分の郷土に対する思いがより深くなると考える。

### (3) 教材について

児童の生活の中には，祭りや地域行事といった伝統や文化が存在し，本教材の「光文字」もその一つに位置づけられる。先人から継承されてきた「光文字」には，その活動を続けてきた新成人たちの思いが込められており，そのどれもが「郷土を大切に思う心」がもととなっている。光文字の活動が始まってから20年目に打ち切りが予定されるが，新成人たちの思いと地域の人たちの協力のおかげで，翌年も継続して光文字を灯すことができることになる。これは，長い年月継続して光文字を灯し続けてきた新成人たちの思いが名護市全体に広がっていったからだと考えられる。だからこそ，地域の人たちの協力を得られたのではないだろうか。

この教材を通して，銭ヶ森の光文字は，新成人たちの「郷土を大切に思う心」が名護市全体に広がり，今日まで受け継がれてきた文化であることに気づかせたい。

## ③ 教材活用のポイント

○光文字が継続して行われた背景にある新成人たちや地域の人たちの思いを板書にすることで，「郷土を大切にしたい」という思いの広がりを視覚化する。

○自分たちの地域にはどのような伝統や文化があるのか問うことで，自分たちの地域についても想起させ，本時の内容を自分ごととして考えさせる。

## ④ 他教科等との関連，家族・地域との連携など

社会科の学習や総合的な学習の時間では，自分たちの住む地域についての調べ学習が始まる。それらの学習と関連させて授業を行うと効果的である。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○地域の文化に込められた思いやその広がりについて気づいているか。

○郷土を愛する心を学び，自分なりの思いをもつことができているか。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 自分たちの地域にある行事について話し合う。	○ 自分たちの生活する地域にはどのような行事がありますか。 ・豊年祭 ・お祭り ○ 地域にある行事はなぜ今まで続けられてきたのかな。	* 地域にある身近な行事を取り上げることで、本時に関心をもたせ、同時にそれらがなぜ今まで続いてきたのか等の問題意識をもたせる。
展開	(2) 教材「山に灯る一文字 銭ヶ森の光文字」を読んで、考え、話し合う。  (3) 郷土を愛する心が広がっていくことのよさを考える。	○ なぜ光文字は中止にならなかったのかな。 ・新成人たちが募金活動などを行ったから。 ・地域から光文字を行うための資金が集まったから。  【新成人たちの思い】 ○ なぜ新成人たちは光文字を継続して灯したのだろう。 ・先輩たちから受け継がれてきた活動だから。 ・自分たちの住む地域を大切にしたいと思っているから。  【地域の人々の思い】 ○ なぜ名護市の人たちは光文字を灯し続けることに賛成したのか考えてみよう。 ・新成人ががんばって活動を続けてきた思いが伝わったから。 ・また来年も光文字が灯されているのを見たいから。  【二つの共通点】 ◎ 光文字の活動の中心となった新成人と、その活動を支えた地域の人たちの共通点は何だろう。 ・自分たちの住む地域が好き。 ・自分たちの住む地域のために、自分のできることをしたい。 ・自分たちの住む地域を大切にしたい。	○ 導入での問題を考えながら範読を聞くよう伝える。 ○ 児童は教材に書かれていることを答えると予想される。そこからさらに、補助発問等を通して本時のねらいに迫っていきたい。  ▲ 「作業が大変な活動だけど、先輩たちから受け継がれてきたから、しかたなく続けようとしたのかな。」 * 新成人たちは誇りをもって光文字の活動を続けていることに気づかせる。  * 光文字を継続させるために活動を支えた、地域の人たちの思いについて考えさせる。 ○ 構造的な板書を行い、新成人たちの思いが地域の人たちをはじめとする名護市全体に広がっていく様子を視覚化する。 ▲ 「地域の人たちは『自分が来年も光文字を見たいから』という理由だけで協力してくれたのかな。」  * 地域の人たちが光文字の活動に協力してくれた理由として、「自分が来年も光文字を見たいから」という心だけではなく、「名護市が好きだからこそ、自分たちも名護市のために何かしたい」という心があることにも気づかせたい。 * どちらにも「郷土を大切に思う心」があることを知り、その心をもとに行動することで、「郷土を大切に思う心」がどんどん広がっていくことに気づかせたい。
終末	(4) 授業を振り返る。	○ 今日学んだことをノートに書きましょう。	

# 伝統をつなぐ 古武道家・仲本政博

資料集

p.32 ~ p.35

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統文化を大切に、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

古武道を守り伝えようとする仲本さんの思いや「伝統をつなぐ」ことの意味を理解し、郷土の伝統と文化に関心をもち、尊重しようとする心情を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

学習指導要領によれば、郷土の伝統や文化を大切にすることは、それらに関心をもち、それらと自分との関わりを理解する中から芽生えてくるものだという。では、どうしたら郷土の伝統や文化に児童の関心が向くのだろうか。

「伝統」と呼ばれるものは、「昔からあるもの」と捉えられがちである。しかし、それが「伝統」としてあり続ける背景には、次世代につないできた先人の存在が必ずある。そうした人々の存在に気づき、どのような思いでそれを継承しようとしたかを知ることが、郷土の文化に目を向け、関心をもつきっかけになるのではないか。そうして郷土の文化に関心をもたせることで、伝統をつなぐことに目を向かせたい。そして、先人の努力を知る中で、自分との関わりで文化の伝承を考え、「大切にしたい」という心を育みたい。

### (2) 児童の実態について

児童は、沖縄の伝統や文化といえば、沖縄料理やエイサーなどをすぐに挙げるができる。また、4年生の社会科では、郷土についての学習を経験していることもあり、沖縄の伝統や文化に対する愛着はもっているだろう。

しかし、それらに馴染みはあっても、「大切にしたい」「自分が後世に伝えていきたい」という気持ちは、そう強くはないと思われる。伝統や文化が今もあり続ける背景には、それをつないできた人々の思いや努力があることに気づき、そうした視点を身に付けることを通して、伝統や文化を尊重しようとする心情につなげたい。

### (3) 教材について

児童の中には空手を習っている者もあり、空手が沖縄発祥であることを知っている者も多いだろう。また、2020年に開催される東京オリンピックで追加種目として空手が採用されたこともあって、メディア露出も増え、空手への関心は高まっている。しかし、古武道もまた、空手と同様に沖縄で発祥し、今日まで継承されてきたことはあまり知られていない。

そこで、本時では、古武道を単に「昔からあるもの」と捉えるのではなく、仲本さんのように、古武道を沖縄文化の一つとしてつないできた人たちの思いがあるからこそ「伝統」として続いていることを理解させたい。そうして、伝統をつなぐ人の思いを知ることをきっかけとして、身の

回りの伝統について関心をもち、尊重しようとする心情を育てたい。

仲本さんが古武道を始めたきっかけには、郷土の文化がこのままでは廃れていくかもしれないことを見越した外国人の目があった。また、仲本さんの師匠も、古武道の衰退を危惧し、空手家に存続の協力をお願いしていた。こうした人々の思いを、仲本さんは今につないできたといえる。

そして、無形文化財保持者となった今でも、高校など教育機関に出向いたり、弟子と一緒に指導したりする姿は、古武道を大切に守りたいという自分の思いを、次世代につないでいることの表れと捉えられる。

これらのことから、児童には、仲本さんが自ら「つなぐ役割」と述べている意味を理解させたい。また、何と何を つないでいるのか、つなぐことでどうなるのかを考えることを通して、自分の地域にも目を向け、自分との関わりで伝統や文化を捉えられるようにしていきたい。

## ③ 教材活用のポイント

○仲本さんがどういう思いで古武道を始め、何十年も続けてきたかを考える際、「上司の命令だからではないか」と問い返すことで、仲本さんの思いに迫る。

○仲本さんは何と何を つないでいるのか、について考えることで、「つなぐ」ことの意味について考えさせる。

## ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

○実際に空手や琉舞など、伝統や文化を習っている児童が、自分のつなぐ役割を自覚することがあれば、それを取り上げて、学級で広げたい。

○地域の行事や、地域に伝わる伝統芸能に目を向け、そのことについて家族や知っている人に聞いて調べたり、実際に参加したりすることにつなげたい。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○古武道を守り伝えようとする仲本さんの思いや「伝統をつなぐ」ことの意味を理解しているか。

○郷土の伝統と文化に関心をもち、尊重しようとする気持ちが芽生えているか。



⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 伝統の言葉のイメージを共通確認する。	○ 伝統という言葉から、何をイメージしますか。 ・古いもの。 ・昔からあるもの。 ・続いているもの。 ・昔から残っているもの。	* 学習前の伝統についてのイメージを共有することで、振り返り時にどのような変容があったかを捉えられるようにする。
	(2) 古武道について知る。	○ 古武道を知っていますか。 ・空手と同じだ。 ・武器を使う空手だ。	○ 古武道が、沖縄に古くから伝わる伝統文化であることを伝える。その際、古武器の写真や演武の動画を見せ、興味をもたせたい。
展開	(3) 教材「伝統をつなぐ古武道家・仲本政博」を読んで、考え、話し合う。	○ なぜ仲本さんは、マキューンさんの言葉を聞いて古武道を始めようと思ったのでしょうか。 ・このまま古武道がなくなるのは嫌だと思ったから。 ・自分が古武道を習えば、なくなるのを止められると思ったから。 ・「もうすぐなくなる」と言われたことにショックを受けたから。  ○ 「伝統はつながないと、伝統ではない」とはどういうことでしょうか。 ・これまで続いていたことを、誰か引き継ぐ人がいないと、伝統が消えてしまう。 ・伝統とは、バトンタッチする人と受ける人がいないと、あとに続かないから。  ◎ 仲本さんはどういう思いで古武道を始め、今も続けているのでしょうか。 ・師の平先生が、古武道を残そうとしてがんばっていたことを自分も引き継ぎたい。 ・古武道が好きになり、その魅力を伝えたい。 ・平先生の気持ちに、共感していたから。 ・「もうすぐなくなる」とマキューンさんに言われ、「絶対残してやるぞ」とやる気になっている。 ・古武道を続けることが、仲本さんにとって「つなぐ」ことだったから。 ・次の人につながないと古武道が伝統ではなくなると思っているから	* 仲本さんが、自ら古武道を「つなぐ役割」を担おうと思った意志について考えさせたい。 ▲ 「上司の命令だから、古武道を始めたのではないのでしょうか。」と問い返すことで、きっかけはそうであっても、その後、50年も続けるには、強い意志があったことにつなげたい。  * 伝統文化の歴史の中で、過去と未来の間に立って存続させている存在があることに着目させたい。  * 仲本さんが伝統を守り、伝えようとする思いを理解させたい。
	(4) 「伝統をつなぐ」の意味について考える。	○ 「つなぐ役割」と言っている仲本さんは、何と何をつないでいるのですか。 ・古武道の昔と未来。 ・古武道を習っている人と古武道を知らない人。 ・古武道の魅力を知っている人と知らない人。	* 「伝統をつなぐ」ことの具体的なイメージをもたせ、板書で視覚的に示したい。
終末	(5) 学習を振り返る。	○ 今日の学習で、伝統について新たにわかったことはありますか。 ・伝統はただ昔からあるものではなく、仲本さんのように、つなぐ人がいることで、ずっとつながってきて伝統になることがわかった。	○ 伝統はただ昔からあるものではなく、それを守り伝えようとする人の存在、その人の思いに気づく姿があるかを見取る。

# 生き続けた糸数さん

資料集  
p.36 ~ p.39

## ◇内容項目：D 生命の尊さ

生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。

### ① ねらい

教え子を亡くし複雑な思いに心を痛めた糸数さんや、子どもを亡くした遺族、糸数さんに忠告した父の思いを想像し、人が生きるための命の関係性について考え、生命尊重の価値の理解を深める。

### ② 主題設定の理由

#### (1) ねらいや指導内容について

「命は一人に1つしかない、だから大切である」。命の尊さについて語る時、まさにその通りであり、これ以上端的に説明するのは難しい。しかし、そもそも「命」とは何なのか。命を大切にすることはどうすることか。命に対する感じ方や考え方は、人によって異なってくる。例えば、「命には限りがあり、死んでしまうと二度と生き返ることはできない。一人に1つずつの尊いもの」とするならば、なぜ死刑は許されるのだろうか。「命は大切」という言葉を、子どもはキーワードとしてよく使うが、知っているだけでは具体的な自己の生き方に結びつかない。

そこで、言葉の意味理解ではなく、命は多くの人たちに支えられ、また自分も誰かを支えていることを自覚し、「命は大切」という価値の意味理解を深める。

#### (2) 児童の実態について

児童は「命」についてある程度知識や思いがある。しかし、実際に命の尊さ（親族の死や誕生）を経験したことのある児童や、そのような経験のない児童がいるため、みな同じ土台に立っているわけではない。命に対する捉えも様々なのは当然である。だからこそ、生命の尊さの価値について互いの感じたことや考えを話し合い、新たな気づきや学びを得る必要があるだろう。

#### (3) 教材について

本教材は、戦争の内容を扱っているが、平和の尊さや戦争のむごさを考えるものではない。あくまでも「生命の尊さ」について考えるきっかけとして扱いたい教材である。学習指導要領では、家族や仲間とのつながりの中で共に生きることのすばらしさについて考えを深めていくことが重要であるとされている。糸数さんの体験談の中には、様々な人たちの家族を思う強い気持ちが表現されている。糸数さんもまた、つらい過去を背負いながらも「死にたいとは思わなかった」という強さをもっていた。そこから「自分ならどう考えると、生きていけるか」という問いを中心に、命が互いに支え合っている関係性に気づかせたい。そうして、命のありがたさ、尊さ、自分の存在の価値について自覚し、命を大切にしようとする心情を育みたい。

### ③ 教材活用のポイント

- 戦争教材や命を扱う教材は授業の雰囲気为重くなりがちである。あくまでも、命の関係性に目を向け、生きる希望を見出す前向きな授業であることを心掛ける。
- 事前に沖縄戦や対馬丸の予備知識があると、授業がスムーズに行えると思われる。もしそれができなければ、教材を文節読みして、1節と2節で簡単に沖縄戦や対馬丸の説明をするとよい。

### ④ 他教科等との関連、家庭・地域との連携など

- 5学年用の教材だが、6学年でも十分扱える。総合的な学習の時間（主に平和学習等）と関連して、授業をすると効果的である。
- 大好きな家族の存在、大好きなおじいちゃん、おばあちゃん存在が授業の鍵となる。自分が支えられているだけでなく、自分の存在も相手を支えているという相互の関係に気づけるようにしたい。

### ⑤ 子どもの見取りのポイント

- 人が生きるための命の関係性について考え、生命尊重の価値の理解を深めることができたか。（児童の振り返り例）

僕は戦争で亡くなった人たちの分まで生きたいと思いました。だけど、1人では生きていけなくて、2人だったら生きていけると思いました。なぜなら、2人だったら苦しくてももう1人が励ましてくれるからです。

今日学んだことは、親は子どものことがとても好きで、大事に思っているということです。また、そんな子どもを失った親の悲しみは誰かにぶつけないとやっていられないほど大きいということです。僕は親より早く死なないようにしたいです。

私は、いろんな人に支えられて生きていると思いました。でも、本当は、私自身も気づかないうちに誰かを支えているのかもしれないと思いました。私が生きていることで、誰かの命を支えているとしたら、それはすごくうれしいし、簡単には死ねないなと思いました。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 学習を見通す。	○ 命には限りがあり、一つしかないから大切であることは知っていますね。今日はそんな命の大切さをもっと違う角度から深く考えてもらうために、対馬丸事件の生き残りである糸数さんの話をします。	○ 可能ならば、沖縄戦や対馬丸事件についての学習を事前にしておくと、本時の中で説明が省かれ、価値の理解を深める活動に焦点化できる。
展開	(2) 教材「生き続けた糸数さん」を読んで、考え、話し合う。  (3) 命の関係性について考える。	○ 糸数さんはどうして那覇の町が怖かったのかな。 ・教え子の遺族に会ってしまうから。 ・会うと「子どもを返せ」と言われるから。  ○ 複雑な思いとはどんな思いでしょうか。 ・自分だけ助かってしまった自責の念。 ・疎開を勧めなければよかったという後悔。 ・お父さんを辛い目にあわせてしまった後悔。  (補助発問に対して予想される発言) ・誰かを責めないと気が済まなかった。 ・それだけ子どもを愛していた。  ○ 「いいか、自分が対馬丸の生き残りであることは決して人には言うてはいけないよ。お前より辛い目にあっている人は沖縄にはたくさんいるんだからな。」お父さんはどういう思いでこう言ったのかな。 ・教え子の遺族や世間から娘を守るため。 ・沖縄戦を目の当たりにして、実際家族を亡くして辛い人がいっぱいいるから。  ◎ 自分ならどう考えたら生きていけるか、考えてみましょう。 ・自分が死んでも何も変わらない。 ・家族を悲しませたくない。 ・友達や親戚とかを悲しませたくない。 ・自分より辛い目にあっている人はいる。 ・命は一つしかない。何があっても粗末にはいけない。 ・生きていたらいつかいいことがある。 ・命は自分のものでもあるけれど、家族や支えてくれている人のものでもある。死ぬと悲しむ。	○ 1, 2節は立ち止まり事実確認をする。 ○ 亡くなった人の数は正確ではない。  ○ 3節と4節はつなげて読む。 * 遺族に会うことを恐れる心情を理解する。  ▲ 「これは戦争のせいで、糸数さんのせいではないのに、遺族はひどいのではないか。」 * ゆさぶりの発問。親と子の関係性に気づかせたい。  * 娘を思う父の思いや、遺族らの気持ちを大事にする父の考えに迫る。ここでも親と子の関係性に気づかせ、遺族らの思いとの共通点を見出す。 ○ お父さんの思いを理解したからこそ、糸数さんの複雑な心情をおさえた。  * 「どうして生き続けられたのだろうか」では糸数さんが生き続けた理由の推測になる。そこで、「自分ならどう考えると生きていけるか」と問うことで、自分ごとにして生きる理由をもたせたい。 ▲ 「耐えられなくて生きていく自信を失ってもしかたないんじゃないかな。」  ○ 支える、支えられる命の関係性に気づかせる。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 今日学んだことをノートに書こう。	

# 琉球ガラス職人 池宮城 善郎

資料集

p.40～p.43

◇内容項目：A 希望と勇気、努力と強い意志

より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。

## ① ねらい

琉球ガラス職人池宮城さんの挑戦し続ける生き方から、努力を続けるために大切なことは様々あるが、がんばれる秘訣は人それぞれであることに気づかせる。そして、自分に合った秘訣を見つけ、自己の向上のために、より高い目標を設定し、その達成に向け前向きに努力しようとする実践意欲を育む。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

目標をもつこと、そして達成に向けて努力することは大事だということを、児童は理解している。児童の実際を考えると、短い期間で単発的に努力をする機会があり、目標を達成できることはある。しかし、それはあくまでもそのとき限りのものであって、くじけずに努力を続けたということとは少し遠い。失敗を重ねながらも夢の実現に向けて努力し続ける池宮城さんの生き方に触れ、なぜそのようなたいへんな努力を続けることができたのか、自分だったらどんなときにがんばれるのかを考えることで、自分に合ったがんばれる秘訣に目を向けさせる。自分を知り、自分に合った秘訣を見つけることで、困難なことに出会っても、それを乗り越え、自己の向上のために、より高い目標を設定し、達成に向け前向きに努力しようとする実践意欲を育む。

### (2) 児童の実態について

この時期の児童は、様々な行事や学習を通して、努力して目標を達成し、満足感を得ることができたという経験を積んできている。しかし、それはあくまでやらなければならないことの中で努力してきたものが多く、自発的なものとは少し遠い。だからこそ本時を通して、実際の自分の生き方の中でも、自分に合ったがんばれる秘訣に目を向けることで、達成に向け努力をしていこうという意欲を育てたい。また、より高い目標を立てたからこそその困難なのだと気づくことができたなら、困難に出合ったときも、くじけず前向きに努力をしていこうという思いをもつことができるだろう。

### (3) 教材について

本教材は、琉球ガラスに魅了され、その道を志し、さらによりよいものに変化させながら受け継いでいこうとするガラス職人の努力や思いを扱っている。職人の思いやくじけずに努力を続ける生き方に触れることが、自分だったらどんなときにがんばれるかを考えさせる入口になる。池宮城さんのたいへんなときでも努力を続けていく生き方に触れ、自分もこんな風に生きていきたいという思いを育ませることができる。また、困難とはマイナスなもの

ではなく、よりよくなろうとしているからこそ生まれるものなのだと前向きに捉えることもできる。中学校で扱われる「より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること」の内容へのつなぎになる。努力を続ける自分なりの秘訣を見つけ、苦しくてもくじけずに物事をやり抜き、失敗を重ねながらも目標に向かっていこうという意欲を育てたい。

## ③ 教材活用のポイント

○自分だったらどんなときにがんばれそうかと問うことで、人にはがんばれる秘訣がそれぞれあることに気づき、自分なりのがんばれる秘訣を見つけ、たとえ困難に出合っても前向きに努力を続けていこうとする実践意欲を高める。

○もっとよくなろうとしているからこそ困難が生じるのだということに気づかせることで、困難に出合ったときでも、プラス思考で努力を続けようという実践意欲を高める。

## ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

○学級目標や個人の学期ごとのめあて、家庭での生活、部活動などの目標などを立てるときに、どんな自分でありたいかを考えさせ、その上で目標を考えさせることで、くじけず努力を続けようとする自分に近づけるようにしたい。

○自分の好きなこと、続けていきたいことと関連づけて考えさせたり、短冊に夢を書いて掲示したりして、キャリア教育の一つとしての活用も考えられる。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○努力し続ける池宮城さんの生き方から、がんばれる秘訣は人それぞれであることに気づき、自分に合ったがんばれる秘訣を考えようとする姿。

○より高い目標を目指すからこそ、困難が生じることに気づき、そこでくじけず前向きに努力することの大切さを考えようとする姿。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 目標があるとどうなるか考え、話し合う。	○ 「目標があると」に続く言葉を考えてみましょう。 ・がんばれる。 ・できるようにしたい、努力しようって思う。 ・諦めないでがんばろうって思う。  ○ でも努力を続けるのってたいへんだよね。努力を続けるのに大切なのは何か考えてみよう。	○ 本時で考えたいテーマについて交流する。  * 考える方向性を示し、問題意識をもたせる。
展開	(2) 教材「琉球ガラス職人 池宮城 善郎」を読んで、考え、話し合う。	○ 池宮城さんはどうやって名工といわれるまでになったのでしょうか。 ・美しさにひかれて。 ・毎日努力して、それを続けたから。 ・やっていくうちにもっとやりたい、おもしろいと思うようになって、次もやってみようと思えたから。  ○ 池宮城さんは、なぜがんばれたのでしょうか。 ・いろいろ試していくことで楽しくなった。 ・たいへんだけれど、いろんな作品が生まれることがおもしろくて、その喜びの方が大きかったから。	○ 範読する前に、琉球ガラスのコップ（現物、もしくは教材の写真）を見せ、興味をもたせる。 * どうやって名工といわれるまでになったのかを問うことで、そこまでの道のりが長くけわしいものであったということにも気づかせる。  * たいへんな中で池宮城さんが、自分から様々なことにチャレンジしてきたことに触れさせる。
	(3) 自分のがんばれる秘訣について考える。	◎ 自分ならどんなときにがんばれそうかな。 ・自分だったら難しい……。でも自分がやりたいことだったらできるかも。 ・人に喜んでもらえたら。 ・やっていて楽しいとき。 ・自分が納得できるもの。自分の好きなこと。 ・仲間がいっしょだったら。 ・まだまだもっとあるぞって思えたらがんばれる。  ・もっとよくしたいって自分で目標を立てればできるかも。 ・困難を感じるのは、がんばっているからこそなのではないかな。	▲ 「でも、3年も5年もだよ。こんなに続けられるかな。」 * 自分だったら、こんなに長い年月をかけてチャレンジし続けられるか問うことで、自分も好きなことだったらできるかも、もっといいものにしたいと自分で目標をもつことでがんばれることに気づかせたい。  ▲ 「どうしてたいへんなのにプラスに考えられるのかな。」 * どうしてたいへんなのにプラスに考えることができるのか問うことで、困難が生まれるのは、自分自身で目標を立ててがんばろうとしているからこそなのだと考えられるようにしたい。 ○ 目標があるからがんばれるという理由だけにとらわれないようにする。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 自分の考え以外に誰の考えに共感できたか書いてみよう。	○ 今日の学びを踏まえて自分なりに書いて振り返り、交流する。

# 守り、受けつぐべきもの うるま市の平敷屋(東)エイサー

資料集  
p.44 ~ p.47

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統文化を大切に、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

伝統を守り受け継ぐことは、時に厳しさや難しさを伴うが、それでも守り抜こうと思う背景には、先人の努力を思う感謝の気持ちや地域への誇りがあることに気づき、受け継がれてきた伝統や文化を大切にしようとする心情を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

我が国や郷土の伝統を継承することは、長い歴史を通じて受け継がれてきた風俗、習慣、芸術などを大切に、それらを次代に引き継いでいくということである。しかし、それらの伝統のなかには、時に厳しさや難しさを伴うものもある。だが、その「厳しい伝統」を守り、受け継ごうと努力する人たちがいる。彼らがそうする背景には、これまで受け継いできた先人の努力を思う感謝の気持ちや、郷土への誇りなどがある。これらのことを児童が感じ取ることができると、「伝統」そのものに対する見方や考え方も広がりを見せ、より深いものになると考える。

以上のようなことを考えさせるなかで、受け継がれてきた伝統や文化を大切にしようとする心情を育てたい。

### (2) 児童の実態について

これまで、児童はエイサーなどの伝統芸能を見たことがあり、またそれらは、沖縄独自の文化であることをわかっている。また、運動会や地域の行事などで実際にやったことのある児童もいるであろう。しかし、それらは「ただ見ている」、「ただやったことのある」だけのことが多い。伝統を受け継いできた先人の努力や、懸命に守り受け継ごうとしている人の思いを感じ取りながら伝統と関わることができると、その印象も変わってくる。よりかけがえのないものとして、これからの生活と結びついていくと考える。

### (3) 教材について

本教材では、「厳しさもあるなかで、それでも懸命に伝統を守ろうとするゴウの気持ち」を中心に扱っていきたい。気持ちに迫るなかで、その支えには先人の努力を思う感謝の気持ちや郷土への誇りがあることを感じ取らせたい。

その発問に到達するまえに、是非児童に理解させてほしいところが二点ある。

#### ① 伝統のなかには、厳しさや難しさを伴うものがある

平敷屋(東)エイサーには、「年齢制限」「踊り手になれるのはその地域に住んでいる人だけ」など、他地域とは異なる伝統がある。過疎化によって地元に住む人が少なくなっている平敷屋の現状から考えると、守っていくのが難しい伝統といえる。

#### ② ゴウにとってのエイサーの存在

ゴウにとって、エイサーは人生をともにしているといえる。幼少期に、地元の青年会が踊る姿を見て憧れをもち、同時に家族から期待を寄せられる。そして高校卒業後、念願の青年会に入り、昔から変わらない伝統を守り受け継ごうとする先輩たちの姿を目にする。そして今、自分自身がその責任を一番に背負う存在となっている。

このように、ゴウにとって地元のエイサーは幼い頃から身近にある存在であり、生活や生き方にも大きな影響を与えている。またエイサーを通して、地域の人との出会いや、つながりを広げていることも気づかせたい。

#### ③ 教材活用のポイント

○平敷屋エイサーが守っている伝統を出し合い、それを受けてどう思うか問うことで、「厳しい」伝統もあることに気づかせる。

○中心発問での児童の発言をもとに、そこから問い返し、「伝統を守ってきた先輩の努力やその努力に対する感謝の思い」や「伝統はその地域の誇りにもなっている」ことについてまで深く感じ取らせるようにしたい。

○次時に「『琉球國祭り太鼓』の挑戦 創作エイサー誕生」を扱うことで、「創造する伝統」についても考えさせることができ、より伝統について多面的・多角的に深めることができる。

#### ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

○行事でエイサー等の伝統芸能を踊る機会があれば、「どのような気持ちで踊るか」について考えさせるとよい。

#### ⑤ 子どもの見取りのポイント

○伝統を守り抜こうと思う背景には、先人の努力を思う感謝の気持ちや地域への誇りがあることを理解することができていたか。

○受け継がれてきた伝統や文化を大切にしようとする心情をもっているか。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 身近にある伝統を出し合う。	○ 私たちの身の回りにはどんな伝統がありますか。 ・エイサー ・方言 ・空手 ・三線	* 身の回りには、多くの伝統があることを押さえる。板書はしなくてもよい。
	(2) 伝統を受け継いでいくために必要な気持ちについて考える。	○ 伝統を守るために必要なことは何かな。 ・受け継ぐ人。 ・受け継ぎたいと思う人。	
展開	(3) 教材「守り、受けつぐべきもの うるま市の平敷屋（東）エイサー」を読んで、考え、話し合う。	○ 平敷屋エイサーにはどのような伝統がありましたか。 ・年齢が25歳までと決まっている。 ・平敷屋に住む人しか踊れない。 ・大太鼓は使わない。 ・昔と変わらない踊り(深夜にまで及ぶ練習)。  ○ 平敷屋エイサーの伝統を知って、どう感じましたか。 ・厳しい伝統をもっている。 ・変えてもいい伝統もあると思う。  ◎ 厳しさもあるなかで、それでも平敷屋の人たちが懸命に伝統を守ろうとするのはなぜだろう。  ・これまで受け継いできてくれた先輩たちのためにも守りたいと思っているから。  ・きまりを守ることで、伝統を守りたかったから。	○ 範読する前に、平敷屋エイサーについて触れ、「どのような伝統があるのかな」と、読む際の視点を与えるようにする。  * 平敷屋エイサーには、厳しさや難しさを伴う伝統もあることに気づかせる。また、そのようななかでも守り受け継ごうとしているゴウの姿を押さえ、中心発問に入りたい。  ○ まずはノートに書かせるなどし、一人で考える時間を充分に取りたい。交流させる際は、伝統を守り続けることのデメリットにも目を向けさせるとともに、児童の発言に問い返し、「伝統を守ってきた先輩の努力やその努力に対する感謝の思い」や「伝統はその地域の誇りにもなっている」ことに迫るようにしていく。  ▲ 「先輩たちに対して、どのような思いをもっているのかな。」 * これまで守り受け継いできた先輩たちの努力や、その努力に対する感謝の思いに迫るようにする。  ▲ 「こうした厳しいきまりがなければ、平敷屋エイサーの伝統は守れなかったのかな。」 * 昔から変わらないものを受け継ぐ姿を見せることは、その地域の誇りにもなっていることに気づかせたい。
	(4) 平敷屋がエイサーを通して守り、受け継いできたものを考える。	○ 平敷屋エイサーで守り受け継がれてきたものは何かな。 ・これまで受け継いできた先輩たちに対する感謝の気持ち。 ・地域の誇り。	* 厳しいきまりを守ることで、平敷屋エイサーが守り受け継いできたものを考えさせたい。
終末	(5) 学習を振り返る。	○ 今日学んだことをノートに書きましょう。	○ 行事でエイサー等の伝統芸能を踊る機会があれば、「どのような気持ちで踊るか」についても考えさせてもよい。

# 「琉球國祭り太鼓」の挑戦 創作エイサー誕生

資料集

p.48 ~ p.51

◇内容項目：C 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度

我が国や郷土の伝統文化を大切にし，先人の努力を知り，国や郷土を愛する心をもつこと。

## ① ねらい

今まで受け継がれてきた伝統を，時代に合ったものにするために，さらによくしようと形を変えた伝統もひとつの伝統であることに気づき，継承と発展の二つの側面を踏まえて，これからの伝統文化と関わっていこうとする態度を育てる。

## ② 主題設定の理由

### (1) ねらいとする価値について

我が国や郷土の伝統を継承することは，長い歴史を通じて受け継がれてきた風俗，習慣，芸術などを大切にし，それらを次代に引き継いでいくということである。しかし，形を変えずに受け継がれてきたものだけが「伝統」ではない。その時代や場に合ったものにするため，形を変え発展したものもある。「伝統」をこのように考えると，受け継がれてきたものを継承する側面と同時に，明日からの未来へ向かって発展させていく側面をもつことがわかる。このことを児童が感じ取ることができると，「伝統」に対する見方や考え方も広がりを見せ，より深いものになると考える。

以上のようなことを考えさせるなかで，継承と発展の二つの側面を踏まえて，これからの伝統文化と関わっていこうとする態度を育てていきたい。

### (2) 児童の実態について

これまで，児童は身の回りにある伝統文化に触れており，これらは長い歴史を通じて受け継がれてきたものであるとわかっている。しかし，その伝統文化が，「昔から形を変えず受け継がれてきたものなのか」，「ある時に形を変えたものなのか」などの視点をもって見ることは少ない。継承と発展という伝統の二つの側面を感じ取りながら見ることができると，伝統の見方・考え方をさらに深めることができるであろう。

### (3) 教材について

本教材では，新たに生まれた琉球國祭り太鼓について考えさせるなかで，伝統がもつ「発展」の側面について迫っていききたい。しかし，昔から受け継がれてきた伝統の形を変えてしまったことに納得できない児童が出てくるのが考えられる。このような児童の発言を受けても，本時のねらいに迫る問い返しをするためには，次の二つについて教師が理解しておくことが大切である。

#### ① 伝統にはすべてはじまりがある

すべての伝統には必ずはじまりが存在する。例えば，今では「伝統エイサー」として有名な平敷屋エイサーにもはじまりはあった。

このように考えると，伝統を変えた時点では，伝統とい

えなくても，徐々に周りの人に理解され，何十年も受け継がれるようになると，きっと伝統と認められるようになるであろう。形を変えた「その時」だけでなく，未来に目を向ける視点をもたせるようにしたい。

#### ② 形を変えることによって，エイサー文化は広がっている

「大太鼓千個を打ち響かせたい」，目取真さん一人から始まった大きな夢。その夢は，結成当初集まった50人，それが今は2500名にまで広がりを見せている。また，「こんな迫力のあるエイサー初めてだよ」などの言葉も聞かれ，観ている人にも感動を与え，応援してもらえるようになった。このように考えると琉球國祭り太鼓の挑戦は，今となっては目取真さん一人だけの夢とはいえないであろう。

昔から受け継がれてきた伝統エイサーをもとに，そこからよりよくしようと今までなかったことを創造するなかで，エイサー文化は広がりを見せ，発展しているのである。

## ③ 教材活用のポイント

○前時に「守り，受けつぐべきもの うるま市の平敷屋(東)エイサー」を扱うことで，伝統エイサーについても触れることができる。厳しさを伴うなかでも，昔からの伝統を守り受け継ぐことのよさを感じ取ったうえで本教材に入ることで，伝統の二つの側面について，より多面的・多角的に迫ることができる。

○中心発問での児童の発言をもとに，そこから問い返し，「さらによくしようとしたり時代に合ったものにしたりにするために，形を変えたものもひとつの伝統である」ことに気づかせるようにしたい。

## ④ 他教科等との関連，家族・地域との連携など

○伝統文化を実際に体験することがあれば，調べ学習の際の視点として，「昔から形を変えず受け継がれてきたもの」，「ある時に形を変えたもの」などの視点をもたせることができ，その伝統文化に対する理解を深めることにつながる。

## ⑤ 子どもの見取りのポイント

○時代に合ったものにするために，さらによくしようと形を変えた伝統も，ひとつの伝統であることを理解することができていたか。

○伝統がもつ継承と発展の二つの側面を踏まえて，これからの伝統文化と関わっていこうとしているか。



⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 伝統から連想することを交流し、創作エイサーについて紹介する。	○ 「伝統」から思い浮かぶ言葉は何ですか。 ・エイサー ・守る ・変わらない  ○ 今日の学習では、「これからの伝統との付き合い方」について考えていきましょう。	○ 「伝統エイサー」と「創作エイサー」を対比させて説明する。「守り、受けつぐべきもの うるま市の平敷屋(東)エイサー」を学習したのであれば、そこでの学びを振り返るとよい。  ○ 終末で振り返りを書かせる際に、同じ視点を与え、考えの変容をみる。
展開	(2) 教材「『琉球國祭り太鼓』の挑戦 創作エイサー誕生」を読んで、考え、話し合う。  (3) 伝統の継承と発展、二つの側面について考える。	○ 琉球國祭り太鼓が新しくしたものには、どのようなものがありましたか。 ・年齢制限をなくした。 ・女性でも太鼓を持てるようにした。 ・どこに住む人でも入れるようにした。  ○ これまで受け継がれてきた伝統を変えたことについて、どう思いますか。 ・多くの人に参加できるようになったし、観る人も楽しんでいるのでよかったと思う。 ・批判の声があったように、守ってきたものを変えてしまうのはよくないと思う。  ◎ 琉球國祭り太鼓は、なぜ新しいエイサーとして発展することができたのでしょうか。 ・誰でも参加できて、盛り上がるから。 ・新しいけれど、伝統的な部分もあるからなじみやすい。 ・多くの人に新しいエイサーとして認められたから。	○ 範読する前に、琉球國祭り太鼓のはじまりが伝統エイサーであることを伝え、「琉球國祭り太鼓が新しくしたものにはどのようなものがあるのかな」と、読む際の視点を与えるようにする。  ○ 教材の内容を踏まえてもいいが、あくまで「自分の考え」として問うようにしたい。 * 周りからは、プラスとマイナスの両方の反応があったことを確実に押さえる。そのうえで、自分なりの考えをもたせるようにしたい。 ▲ 「琉球國祭り太鼓のエイサーは、伝統とよべるのか。」  ○ まずはノートに書かせるなどし、一人で考える時間を充分に取りたい。交流させる際は、児童の発言に問い返し、「さらによくしよう」としたり時代に合ったものにしたりにするために、形を変えた伝統もひとつの伝統である」ことに迫るようにしていく。 * 創作エイサーのよさに目を向けるようにし、「伝統にはすべてはじまりがある」ことを押さえる。形を変えた「その時」だけでなく、その後の未来に目を向ける視点をもたせたい。 * さらによくしようと今までなかったことを創造するなかで、エイサー文化は広がりを見せ、発展していることに気づかせたい。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 伝統とは何か、今日考えたことをまとめましょう。 ・さらによくしようと、途中で形を変えた伝統もある。 ・昔から受け継いできたものなので、それも大事にしていきつつ、これからもっと広めるためにこれまでの伝統を見直したい。	○ 伝統エイサー・創作エイサーのどちらかを否定するのではなく、それぞれがもつよさに目を向けさせるようにする。

# 平和をつなぐ ひめゆり平和祈念資料館

## ◇内容項目：D 生命の尊さ

生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。

### ① ねらい

ひめゆり平和祈念資料館の建設までの経緯から、戦争は生き残った人も含めて、多くの人の心を深く傷つける恐ろしいものであることに気づかせることができる。また、その思いを受け継ごうとする仲田さんの考えを理解することで平和を守っていこうとする心情を育てる。

### ② 主題設定の理由

#### (1) ねらいや指導内容について

日本の長い歴史の中に、戦争という忌まわしい過去が存在する。戦時中は、人々の尊い命でさえも軽視され、その結果、多くのかけがえのない命が奪われてしまった。その事実、亡くなった人の遺族だけでなく、多くの人々にとっても辛く悲しい記憶として今も残っている。しかし、私たち日本人は、戦後70年以上が経ったにもかかわらず、改めて戦争の悲惨さや恐ろしさを語り継いできている。

その理由の1つとして、戦争体験者の「もう二度と戦争を起こしてはならない」という強い意志の表れがある。その思いの裏側には、どんなに小さな命でも犠牲にはならないというメッセージも込められている。

一方で、戦争を知らない世代の子どもにとって、戦争の悲惨さや恐ろしさのある程度理解したとしても、本当の恐ろしさや生命の尊さを身近に感じたり、平和を守っていこうという思いをもつことは、とてもハードルの高いことだと考える。

そこで本時では、戦争は「生命は尊い」という当たり前の価値観さえも変えてしまうという恐ろしさに気づかせたい。また、戦争を一度始めると止めることは難しいことや、だからこそ、平和を守り受け継いでいくことが大切であることを理解させたい。

このような意図から、本時では戦争を取り上げて、子どもに生命の尊さや平和の大切さの価値の自覚を目指す。生命の尊さは、日常生活でも置き換えて考えることができる。つまり、時と場合によって人々の価値観は変わってしまうが、どんな時でも生命が尊いものであることを深く自覚しておれば、今後のいじめ問題等にも、道徳的判断力が大きく影響すると考える。

#### (2) 児童の実態について

この時期の児童は、小学校入学時から平和学習を通して、少なからず沖縄戦について学んできている。そのため、ある程度の知識をもっており、戦争の悲惨さや恐ろしさを理解している。しかし、戦後70年以上の年月が流れ、身近に戦争体験者が存在しないこともあり、自分たちと戦争は無関係と感じている児童も少なくない。それは、平和学習にも表れており、どこか遠くの国のことと捉えて

おり、我が国で起こった歴史として身近に引き寄せて考えている児童は少ない。また、平和でありたいという思いはもってはいるものの、戦争から何を学ばよいか漠然としている児童の姿も見られる。

そこで、この時期の児童に、戦争の本当の恐ろしさについて考えさせたい。そして、平和を守り受け継ぐ継承者としての自覚を高めていきたい。

#### (3) 教材について

本教材は、沖縄戦でひめゆり学徒隊として戦場を体験した人々が、ひめゆり平和祈念資料館を建設し、その思いを次世代へ語り継ぎ、平和の尊さを訴えていこうとする思いと、それまでの苦悩と決断が描かれている。また、証言者の高齢化が進み、戦争体験者による語り継ぎが難しくなってきた現状に直面し、ひめゆり平和祈念資料館で働く仲田さんはそのバトンを受け、戦争を知らない世代へ伝えていこうとしている。

仲田さんは実際に戦争を体験してはいないが、教材の後半に出てくる仲田さんの言葉からは、証言者を通して学んだ戦争の恐ろしさや平和の尊さを語り継いでいくことの大切さが伝わってくる。

その言葉の意味を深く考えさせることで、生命を尊重することの難しさや大切さに気づかせたい。

### ③ 教材活用のポイント

- 生存者の「罪悪感で苦しみ」という思いから、戦争を終えてからも、人々の心を深く傷つけてしまうものであることを理解させる。
- 戦時中のひめゆり学徒隊の考えを問うことで、戦争は「生命が尊いものである」という価値観さえも変えてしまうことに気づかせる。
- 中心発問で、児童の発言に対して「戦争の恐ろしさとはどんなことだろう」や「私たちが守る平和とは何だろう」などと問い返していくことで、児童の真意を引き出していく。

### ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

社会科や総合的な学習の時間と関連させ、沖縄戦の歴史に興味をもたせ、児童が調べてみたい課題を設定し調べ学習を行う。

### ⑤ 子どもの見取りのポイント

- ひめゆり平和祈念資料館を建設するまでの経緯を考えることを通して、本当の戦争の悲惨さや恐ろしさに気づき、平和を守っていこうという考えをもつことができたか。
- 沖縄戦から学んだことを自分ごとに引き寄せて考え、自分たちにできることを考えることができたか。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 沖縄戦について話し合う。	○ 沖縄戦について知っていることを言ってみましょう。 ・最後の地上戦が行われた場所。 ・多くの人が亡くなってしまった。	* これまで学んだ沖縄戦や第2次世界大戦について想起させることで、教材への方向づけを行う。 ○ 事前に沖縄戦の写真やイラストを用いて、戦時中の様子をイメージしやすいようにするとよい。
展開	(2) 教材「平和をつなぐ ひめゆり平和祈念資料館」を読んで、考え、話し合う。	○ ひめゆり学徒隊の生存者が、30年以上経つまで戦争体験を人に語る事がなかったのはなぜだと思いますか。 ・つらくて思い出したくなかったから。 ・生き残ったことへの罪悪感から。  (補助発問に対して予想される発言) ・自分だけが生き残ったことが苦しかった。 ・みんなと一緒に死んだ方がよかったとさえ感じたから。  ○ 30年以上の月日が経ってようやく戦争体験を語ったり、ひめゆり平和祈念資料館を建設しようとしたりしたのはどんな思いからですか。 ・このままではいけないと思った。 ・亡くなった友達の分まで頑張ろう。 ・自分たちが戦争のことを伝えないと、戦争の本当の恐ろしさや悲惨さが受け継がれない。 ・もしかしたら、また戦争が起ってしまう。  ◎ 「証言員」の思いと仲田さんの思いを比べてみて、共通しているところと異なっているところを考えてみよう。 ・（証言員の思い）戦争で犠牲となった友達の死を無駄にしないためにも、命の大切さを伝えたい。 ・（仲田さんの思い）戦争を知らない若い世代に、戦争の悲惨さ、平和の尊さを知ってもらいたい。 ・（共通の思い）これからの人たちは、二度と戦争を起ささないで、平和な世界を築いてほしい。	▲ 「生き残ることはうれしいはずなのに、なぜ、罪悪感で苦しんだのか。」 * 戦後、生きることにさえも苦しむ人々の心情に触れさせることで、戦争の悲惨さに気づかせる。  * 戦争を知らない世代へ、戦争の悲惨さと恐ろしさを語らなければいけないという使命感から動き出した、証言者の思いに触れさせる。また、同時に戦争や平和への意識が薄れている現代の人々の考えにも気づかせる。  * 子どもが戦争に対して感じ取ったものを大切にしながら、平和を守っていこうとする意識が深まるようにする。 ▲ 子どもの発言に対して「戦争の恐ろしさとはどんなことだろう」や「私たちが守る平和とは何だろう」などと、問い返していくことで、子どもの真意を引き出していく。
	(3) 平和を守るためにできることについて考える。	○ 平和を守っていくために、私たちにできることは何だろう。 ・戦争の事実を学び、伝えていく。 ・どんなことがあっても、命が大切であることを忘れない。	* 戦争を通して考えたことを整理しながら、自分ごとに引き寄せて考えさせる。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 今日学んだことをノートに書きましょう。	* ノートに「わかったこと」を書かせることで、本時の学習について一人で考えさせ、自分の考えを整理させる。

# ヤンバルクイナの森

## ◇内容項目：D 自然愛護

自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。

### ① ねらい

人間が豊かに生活している中で、動植物が危機にさらされていることを知り、自分の行いが他の動植物にどんな影響を与えているのか考えることを通して、自然の中で他の動植物のことも思いやりながら、共に生きていこうとする態度を育てる。

### ② 主題設定の理由

#### (1) ねらいとする価値について

自然は大切に守っていかないといけない、自然は偉大だということを、児童は理解している。しかし、普段から生活の中でそのような心の動きを感じて生きているわけではない。そこで、自分の生活と結びつけて考えさせたい。人間が豊かに暮らしている中で、動植物の生活が苦しくなっている事実を知り、その連鎖に気づき、自分の行いが他の動植物にどんな影響を与えるのかを考え、自然の中でお互いの生きる道を脅かすことなく、思いやりの心をもって、共に生きていこうとする態度を育てる。

#### (2) 児童の実態について

この時期の児童は、自然の仕組みについての理解が深まり、自然の大切さや自然環境に関わる課題について、理解できるようになる。また、動物をかわいがったり、植物を育てたりする活動も経験してきている。しかし実際、自分の行いが自然環境にどのような影響を与えているのかを直接結びつけ、考えながら生活しているわけではない。普段の生活では、目の前で動物が危機的状況に陥るのを見るわけでもなく、自分の行いと自然環境とのつながりをイメージすることは難しい。

#### (3) 教材について

本教材は、沖縄県に生息するヤンバルクイナが絶滅の危機にさらされている事実について扱っている。人間の生活が豊かになっている中で、動植物が危機的状況に陥っていることを知ることが、この学習の第一歩になる。自分の生活と自然環境を結びつけて考えるきっかけとして扱いたい教材である。学習指導要領でも、人間の生活を豊かにすることを優先し、十分な思慮や節度を欠いて自然と接してきたことに気づかせることが明示されている。その現状をふまえ、人間も自然の中で生かされていることを考えさせ、人間と自然や動植物との共存の在り方を積極的に考え、思いやりの心をもって、自分のできる範囲で自然環境を大切にしようとする態度を育てていきたい。

### ③ 教材活用のポイント

○自然環境の危機について考えると、人間の行いを責めることに意識が向きがちである。しかし、自然環境だけを考えることが大切なのではなく、人間と自然が共存して

いく生き方を前向きに考えられる授業を心掛けることが大事である。

○「私たち人間がすべてではない」とはどういう意味かを問う中心発問では、児童の反応を予想し、「他の動物たちはどう暮らしているのか」「では、私たちはどう生きたらいいのか」など問い返しを準備しておき、ねらいに迫ることができるようにする。

### ④ 他教科等との関連、家族・地域との連携など

○6学年理科の「生物と環境」の学習と関連させて、人と環境について理解した上で、授業を行うこともできる。  
○学習の前後に、家庭科の「消費生活・環境」の「環境に配慮した生活」で、自分自身の生活と環境との関わりについて考えたり、実際に生活に生かしたりすることもできる。

### ⑤ 子どもの見取りのポイント

○自分の行いが他の動植物にどんな影響を与えているか考えようとする姿。  
○自分自身も、自然のことを考え、思いやりながら共に生きていこうとする姿。

⑥ 学習指導過程

	児童の学習活動	主な発問と予想される児童の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 自然環境について考え、話し合う。	○ 自然を守るってどういう意味だろう？ ・自然を大切にすること ・生き物を大事にする ・森林を伐採しない	* 本時で考えたいテーマについて交流し、問題意識をもたせる。
展開	(2) 教材「ヤンバルクイナの森」を読んで、考え、話し合う。  (3) 人間と自然の共存について考える。	○ なぜヤンバルクイナを守らなければいけないのかな。 ・貴重な鳥だから。 ・守らないと絶滅してしまうから。 ・人間が勝手なことをすることで命が危ないから。  ○ でもヤンバルクイナがいなくても困らないでしょう。 ・うん、困らないよ。 ・沖縄県にしかいない鳥がいなくなるのは悲しい。 ・困るか困らないかじゃない。  ◎ 長嶺先生の「私たち人間がすべてではないんだよ。」とは、どういう意味でしょう。 ・他の動植物も地球で暮らしている。 ・人間だけが好き放題をしちゃいけない。 ・地球は人間だけのものじゃないのに、人間の豊かさの中で苦しんでいる。苦しませてしまっている。  ○ 私たち人間は、どう生きたらいいのでしょうか。 ・他の動物だって生きている。安心して暮らせるように、自分の行いを考えて共に生活していきたい。 ・動物に対しても、友達と同じように思いやりの心をもつことが大事。	○ 自然を守るとはどういう意味なのか考えながら聞くように伝え、範読をする。  * 自分たち人間の行為が、動植物を危機に陥らせていることを自覚させる。  * ヤンバルクイナがいなくなることによって、自分にどのような影響が及ぶのかななどについて考え、「でも……」というモヤモヤした気持ちにさせる。 ▲ 「でも、ほかの鳥もたくさんいるよ。」  * 自分の行いが、連鎖して関係し、巡り巡って動植物に影響があることをつかませる。 ▲ 「どうしてヤンバルクイナが生きにくくなっているのかな。」 * 自分たち人間の行為が、動植物を危機に陥らせていることを自覚させる。  ○ 一緒に生きているという意味を考えさせる。 ▲ 「生活が豊かになるっていいことだね。それなのにがまんしなければならないの。」 * 実際自分の生活のどういう部分がヤンバルクイナの生態に影響を与えているのかを考えることができるようにしたい。
終末	(4) 学習を振り返る。	○ 今日考えたことをまとめてみよう。	○ 今日の学びを踏まえて自分なりに書いてまとめ、交流する。

## 小学校道徳 沖縄県郷土資料集 指導案例

日文 教授用資料

令和元年（2019年）8月30日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33478

**日本文教出版 株式会社**  
<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690